

小岩 正樹

早稲田大学理工学術院

はじめに

近世における龍角寺は、元禄に再建された金堂をはじめ、仁王門、鐘楼、二荒神社や龍神宮を主とする境内社があり、古代とは様相を異にした寺観が整えられていた。いずれの建築も現存していないが、文献史料としては「大縁起」「略縁起」のほか、寺院明細帳や龍角寺村の明和9年（1772）と明治5年（1872）の明細帳に記され、遺構としては基壇や礎石が現存し、実在が認められるものである。

1. 金堂（写真1）

近世の金堂は、前金堂が元禄5年（1692）に罹災したことを受け、元禄11年（1698）に建立された。昭和25年（1950）に倒壊の危険のため解体されたが、基壇や柱礎石、昭和に撮影された古写真、保管されている解体部材から、ここでは復元を試みる。

建築概要としては、桁行五間梁行五間の南面する五間四方堂であり、正面に一間の向拝があり、入母屋屋根の平入り、銅板葺となる。

平面については、正面にあたる桁行五間は中の間から脇間、隅間へとやや柱間を小さくする。ただし向拝柱間は堂の中の間よりも広く、そのため堂の正面から渡された海老虹梁は向拝柱に載らず、水引虹梁の背面に掛かることとなる。梁間方向も各柱間寸法に大きな相違をつくらないようにされ、全体としては5丈四方ほどの正方形平面が推定される。間取りは、奥行五間のうち、表側二間を外陣とし、奥に内陣と脇陣を設けた。外陣の見上げを写した古写真からは、二間梁の大虹梁を渡し、上に結綿のある大瓶束

を載せ、束頂部から海老虹梁を掛けたことが知られ、禅宗様との折衷が認められる。内陣では、正面より第五間目の中央あたりに礎石があり、これを来迎壁として、後戸の空間が狭かったと推測される。ここに須弥壇を設け、厨子と本尊を安置したであろう。

柱は、向拝柱こそ几帳面取りの角柱ながら、全体に丸柱を用いたと思われる。長押を打つが、柱には粽があり、台輪を載せ、禅宗様の要素を持つ。組物は三手先とし、肘木の繰りや尾垂木の形状に禅宗様が見られるが、詰組とせず、側廻りの中備は藁股とする。屋根は、軒反りを強くし、妻面も大きく、二重虹梁に藁股と大瓶束を置く。

柱間装置は、側廻り正面では中の間を両折棧唐戸とするが、ほか四間を半葺とするのはやや珍しい。側面は、前から順に、第一間を連子窓、第二間を両折棧唐戸、第三間を腰より上を引戸とする窓（後世の改変か）、第四間を板嵌に高窓、第五間を板嵌としている。

彫物は随所に見られ、軒支輪板も彫刻板とする。ただし、藁股や外陣大虹梁の眉、若葉など



写真1 昭和7年撮影の金堂

（千葉県栄町所蔵・提供）

からは過飾に至らない元禄の風潮が見られる。

以上を要するに、復元される金堂は、禅宗様の要素を意匠として積極的に取り入れ、彫刻の適用も含め、多くの参詣者への応答とした意欲的な建築であったと考えられよう。

2. 旧二荒神社本殿（写真2）

龍角寺境内の旧二荒神社本殿は、平成2年（1990）に現在の社殿に造替されたが、旧社殿は寛文8年（1668）の建立であることが、解体された部材の墨書から判明している。当社の成立には、天台宗および徳川幕府の影響を強く受けていることが知られるが、いずれにせよ当社の存在を示すもっとも古い記録は、部材の墨書すなわち旧社殿の建築となる。

旧社殿は三間社流造りであり、組物は平三斗（隅は出三斗）に実肘木付き、鉄板葺、向拝には浜縁を設けていた。大正以前は茅葺きであったとされ、かつては全体に弁柄塗りが施されたと考えられるが、そのほか大きく改変された箇所は見当たらない。中備は臺股が三箇所配され、頭貫の木鼻や組物の拳鼻、向拝の海老虹梁、水引虹梁、妻の懸魚などに装飾は見られるものの、全体としては控えめな意匠と言えよう。

この旧社殿において特徴的であるのは、建立年と工匠名が記された部材の墨書きである。主に実肘木上端に見られ、「大工」増淵伊兵衛守勝のほか「小工」「木引」の名が確認でき、いずれも常陸国下館市野辺村出身であるという。増淵伊兵衛は安食村に居を構えており、移住大工と言えよう。なお、墨書に増淵伊兵衛の名は複数見られ、筆が異なり、「守勝」と「勝守」



写真2 旧二荒神社本殿

（千葉県栄町教育委員会 1991・第5図）

が併存するため、組織的に記されたと思われる。ほかに墨書に登場する人物には、龍角寺村領主であった佐倉藩主松平乗久や、「龍角寺弟子玄榮」、「大門善十郎よりきしん（寄進）」とある大門地区住人がおり、組物部材に記録を残すことを考えたのだろう。

3. 仁王門・鐘楼・龍神宮

これらは礎石のみが残り、形姿は不明であるが、仁王門と鐘楼の主軸は、元禄金堂のそれとは異なり、参道の軸線に合致する点が測量調査によって明らかにされている（城倉 2015）。

仁王門は、八つの礎石が残り、その呼称の通り仁王像を左右に安置したと推察される。また旧二荒神社の増淵伊兵衛は、部材墨書に35才の時に「楼門」を手掛けたと記し、「大縁起」では寛文2年（1662）年に全海による楼門・惣門の再建記事がある。礎石からわかる仁王門の柱間寸法は、中央間1丈1尺ほど、脇間7尺ほどであり、これを重層の楼門と考えても規模として不足する値ではない。

鐘楼は基壇の上に建ち、礎石の数から袴腰付きの楼状であったと思われる。龍神宮は浜縁付きの一間社流造りの小祠であったと思われる。

おわりに

以上、龍角寺の近世建築について、断片的ながら眺めてきた。古代とは寺観は異なるが、金堂を中心に主軸を大きく変えることなく、仁王門から堂前まで広く開き、向かって右手に鐘楼と簡単な手水社、金堂の脇を抜けた後面に二荒神社や龍神宮を置き、多くの参拝者を迎えたことと思われる。金堂の外陣正面が蔀戸である点も、開かれた参詣を意図した表現であると思われる、近世参詣文化の隆盛が窺える。

引用文献

城倉正祥 2015「下総龍角寺の測量・GPR（Ⅱ期1・2次）

調査とその意義」『仏教文明の転回と表現』勉誠出版

千葉県栄町教育委員会 1991『龍角寺境内社旧二荒神社本殿調査報告書』